



クロマオー、結婚する。

「行く所がないならずっとここにいるといい。」

翌朝パパヨシに顔を見るなり言われた。朝一番で貰って来たらしい婚姻届を突き付けられて。

「どこにもないなら、いるといい。ここに一途になれるなら。」

クロマオーがすこし困って黙り込むと、（何故って行くところなんてないから）

パパヨシは考えるのも良いと頷き、ついておいでと手招きした。

部屋を出て、

ミゾッフオイが長い髪をまとめている姿を横目で見ながら、与えられた角煮ほどの分厚いコートを羽織った。

やはり外はとんでもない極寒だ。しかしパパヨシが用意してくれたコートは、生命の危険を守るだけの温かさで包んでくれる。

気が重くなるほどの真っ白の中、滑らないように何とかパパヨシのあとをついていく。

「こ れ だ」

よく声が聞こえないが、パパヨシが指をさしたのは大きなつぼと吊り下げられた枯れ葉だった。

パパヨシがつぼに忌むべきユをかけ、その中に手持ちの刷毛を突っ込む。

寒さであっという間に固まった刷毛を枯れ葉に突き刺す。枯れ葉.....じゃない。よく見れば魚だ

。

パパヨシは何度か同じ作業を繰り返し、クロマオーにもしてみるように促した。

仕方ないのでクロマオーもやってみる。難しい作業ではなかった。その間パパヨシは奥の方から枯れ葉に見える魚を取って来て、く わ せ て や る 的な何かを言った。帰れるらしく、ほっと胸をなで下ろす。

「け っ こ ん」

何か言ったようだがクロマオーは無視して黙々と帰った。

うちに帰るとポルカとミゾッフオイが短いシャツとパンツでキャイキャイお話をしていた。楽しそうに納得できない思いがするが、パパヨシを手伝って早速枯れ葉魚を料理し始める。

「最近の男は料理も出来ないとな！おんなを楽しませれば、ご機嫌が良くて面倒でないぞ！」

「そんなに女性におびえては暮らせません。」

「よく言った！それでこそ我が息子！」

パパヨシはご機嫌で魚を焼いている。どうしよう何を言えばこの人に嫌われるだろうと、黒いクロマオーが起動して頭がフル回転するけれど、パパヨシはお手伝いが嬉しかったしか言わない。

でもなクロマオー、ポルカはまだ小さいからあと十年待ってあげてくれ。

女は大事にされたぶんだけ、味が詰まっておいしくなるぞ。

クロマオーはこんなやれやれなヒトに初めて出会った。

僕はマゾクなのに、ものともしないんだ。